様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：８２６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０４３０２

研究課題名（和文）患者視点の理解と臨床活用のためのプログラムの開発

研究課題名（英文）Development of programs for understanding the patient's perspective and clinical utilization

研究代表者
松繁　卓哉（Matsushige, Takuya）

国立保健医療科学院・その他部局等・上席主任研究官

研究者番号：７０５５８４６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、【１】患者・当事者視点をめぐる今日的課題の可視化、【２】患者・当事者視点理解のためのプログラム骨子の作成をおこない、そのうえで【３】保健・医療・福祉の対人援助職従事者が臨床で活用することのできる対象理解（当事者・患者の理解）のためのプログラム評価・理論的検討・周知をおこなった。また、分担研究課題として、がんサバイバーのライフコース上の問題に関する研究、アトピー性皮膚炎患者の受療行動及び日常生活上の困難に関する研究、患者に対する共感／ヘルスコミュニケーションに関する研究を実施し、これらの知見を統合した患者視点理解のためのアプローチを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の医療コミュニケーション研究では、支援従事者と支援対象者との間の情報の共有によって、解消すべき「問題」と、その「解決方法」が決められ、問題解決へと道筋を立てることに力点が置かれてきた。
その一方で今日、コロナ禍に端を発する生活不安、健康不安の他、様々な生きづらさ、生活困窮、精神疾患など複合的な課題を抱えながら生きる人々にとっては、一つの「問題」を特定してしまうことで、その人の抱える複雑に絡み合った問題構造が単純化される側面もある。本研究が従来型のように「解決」をゴールとはしないオルタナティブな支援手法を作り出したことで、対人支援における質・柔軟性・機能の向上に向けた土台形成がなされた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we (1) visualized current issues related to the perspectives of patients and parties, (2) created a program outline for understanding the perspectives of patients and parties, and (3) evaluated, theoretically examined, and disseminated the program that can be used clinically by human support workers in health, medical, and welfare services for understanding patients' view. In addition, as assigned research projects, we conducted research on life course problems of cancer survivors, research on treatment behavior and difficulties in daily life of patients with atopic dermatitis, and research on empathy/health communication with patients, and built an approach to understanding the patient's perspective by integrating these findings.

研究分野：医療社会学

キーワード：患者視点　コミュニケーション　相互理解　支援　対話

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、医療における治療技術の発展や、新たな専門分野の出現などにより、かつては不可能であった病気の治癒が望めるようになった。その一方で、医療に従事する人々の専門分野はますます細分化し、専門分化が進展した。その結果、1 人の患者を数多くの医療者が診ることとなり、患者が医療機関内の様々なセクションを行き来するような状況が常態化した。このことはまた、1 人の医療者がその患者を始めから終いまで診つづけるという、近代以前の医療では普通であった状況を一変させた。今日、慢性疾患等で長期に療養する患者の多くは、複数の医療機関、複数の医療者を受診し、複数の治療薬を服用する状況にある。そうした状況で危惧されるのは、「果たして誰がその患者のことを正しく理解しているのか」という点である。

近年、医療や福祉のサービスを利用者にとって満足のいくものとするために、社会学・社会福祉学や近接領域の研究知見が貢献を果たしてきた。とくに、患者、あるいは専門的知識を持たない「素人」（lay person）の経験・視点・語りに着目し、専門職従事者とは異なる病や障害に対する固有の眼差しを明らかにする研究（例えば Lawton 2003, Nettleton et al. 2010）が医療や福祉の実践に関して視点の転換をもたらしてきた。しかしながら、近年の医療・福祉をめぐる著しい環境変化の中、当事者視点に対する従来の捉え方や説明モデルでは対処しきれない新たな状況が出現してきている。

本研究班のメンバーは、それぞれ異なる専門領域において、こうした当事者視点・患者視点をめぐる新たな動向と、その対処のあり方について知見を積み重ねてきた。研究代表者の松繁（2010）は、医療者による状況把握のための事物認識様式とは異なる、生活文脈の立脚した「患者の知」を理解するための理論的枠組みを提示し、また、そのような生活者の価値基準に立脚する支援のあり方が昨今の日本社会における地域包括ケアシステムにおいて中心的課題であることを示してきた（Matsushige et al. 2012）。研究分担者で総合診療医・医学教育研究者である孫（2015）は、市民と医療者が健康・医療をめぐって共に学び対話できる場所として「みんくるカフェ」を主宰しながら、カフェ型ヘルスコミュニケーションの有効性に関する知見を積み重ねてきた。孫による対話の可能性の検討は、臨床の場における当事者視点の理解に関して多くの実践的示唆をもたらすものとして期待を寄せられてきている。また、研究分担者で人類学者の牛山（2015）は、アトピー性皮膚炎患者のエスノグラフィーをおこない、「標準治療」と「脱ステロイド療法」の狭間で移ろう患者の状況を明るみに出し、「患者の知」を医療のなかで生かす方途を示してきた。

医療・福祉をめぐる環境変化の最たるものとしては、医療技術の進歩により過去には治癒や寛解が不可能だった病気にかかった人々の社会復帰が可能になったということが挙げられるが、このこと自体が新たな社会的課題をつくりだしている。とりわけ、がんのサバイバーなど、病気から快復・寛解した人々にとっては社会復帰後の日常生活において様々な問題が浮上している。これについて研究分担者で健康の社会的決定要因（Social Determinants of Health）を専門とする三澤（2013）は、多くの人々が様々な社会経済的問題から不安を抱える中、健康を志向するような精神性を持つに至る状況を「寄る辺としての健康」と表し、問題提起をおこなってきた。しかし、そうした人々を対象として、社会不安と健康観・ライフコース・アイデンティティ問題との関連について分析する研究は、国内のみならず諸外国においても蓄積に乏しい。

２．研究の目的

本研究は、（１）上述のような医療・福祉の環境変化がもたらす患者視点の変容を理解するための新たな理論的枠組みを提示し、（２）学際的研究体制のもとで、臨床現場で活用可能な患者視点の理解のためのプログラムを開発する。こうした点から、本研究は、医療従事者・医学教育の研究者の視点も組み入れながら、患者・当事者の経験世界の解明に従事する社会科学諸分野の研究者、診療ガイドラインの評価研究に従事する者らを研究体制に組み入れ、実用的ツールとしてのプログラム開発に取り組む初めての研究と位置づけられる。

具体的には、第 1 に患者・当事者視点をめぐる今日的課題の可視化に取り組む。第 2 に患者・当事者視点理解のためのプログラム骨子の作成をおこない、保健・医療・福祉の対人援助職従事者が臨床で活用することのできる対象理解（当事者・患者の理解）のためのプログラム開発・周知をおこなう。

また研究分担者の分担課題として、近年ますます深刻化しているがんサバイバー等のライフコース上の問題や社会不安について、定性・定量の両アプローチから実態を明らかにする。併せて、アトピー性皮膚炎の「標準治療」と「脱ステロイド療法」に代表されるように、多様化する治療オプション・疾病観のもとで患者が直面する困難について、エスノグラフィーによって明らかにしつつ、患者・当事者視点をめぐる今日的課題の可視化をおこなう。

３．研究の方法

第１の研究課題「患者視点をめぐる今日的課題の可視化」では 3 つの実証的研究により展開される。①「がんサバイバーのアイデンティティ・ライフコース上の問題」（三澤）および ②「ア

トピー性皮膚炎患者・患者団体の直面する問題」（牛山）は、いずれも現代医療の発展により新たに生じた事象として解明が大きな課題でありながら、研究の蓄積のなかったテーマである。③「医学教育および保健医療実践における患者視点の活用の課題」のテーマでは、松繁、孫、畠山のそれぞれの専門領域の視点から「患者視点」の活用実践の現状に関するレヴューをおこなう。ここでは、松繁による近年の医療への患者参画に関する文献を対象とする批判的言説分析（Critical Discourse Analysis）や孫による「対話」のワークショップの開催をとおして、次の研究段階であるプログラム骨子の作成へむけた課題の抽出・整理をおこなう。

第 2 の研究課題「患者視点理解のためのプログラム骨子の作成」では、医師・看護師・薬剤師・社会福祉士・介護支援専門員ほか、保健・医療・福祉の対人援助職従事者が臨床で参照できる患者視点理解のためのプログラム（理論的枠組み～手法～実践ツール）を作成する。この段階では、核となる部分を、前年度の成果および申請者らのこれまでの研究知見を相互に照らし合わせながら構成していくこととなる。ここでは、研究分担者の孫による「共感」の概念的構造や共感能力をはかる尺度を用いた研究知見を参照しながら、プログラムの土台を形成していく。

第 3 の研究課題「プログラム評価・理論的検討・周知」では、上記の第 2 課題で作成したプログラムの原型を用いた試験的運用を重ね、効果の検証を実施する。研究代表者の松繁は保健・医療・福祉の実務者養成訓練のための厚生労働省の施設に所属しており、また、研究分担者の孫は医学教育機関に所属していることから、実務者・学生らの協力を得て患者視点理解のためのワークショップ等を開催し、プログラムの評価をおこなう機会の得やすい環境にある。また、研究代表者の松繁を中心に、医療および福祉の実践への当事者参画・患者参画に関する諸外国における実態調査を計画している。これは、Step 2 において当初の予定どおりの成果が得られなかった事態を考慮して、多方面からの検討を可能にするものとして考えている。

４．研究成果

2017 年度

研究計画の初年度である平成 29 年度は、研究代表者・研究分担者が、それぞれの研究計画に沿ってプロジェクトの土台となる基礎作業を遂行するとともに、年度中４回の定例研究会議（5 月，8 月，10 月，30 年 1 月）と、1 回の公開研究会（30 年 3 月）を実施し、各分担研究の進捗を確認した。あわせて研究知見の一部について、市民向け公開研究会を開催し、参加者との対話の中で知見の精査をおこなった。この公開研究会では、「不確実な〈患者視点〉を医学教育に活かすには」というテーマを設定し、1 年間の研究成果をふまえながら、これを教育現場で活用していくための方策を、様々なバックグラウンドを持つ一般参加者（教員、学生、患者団体関係者、医療従事者、企業職員、その他）からの意見収集とディスカッションによって検討するなど、今後の研究の進展にとって有意義な機会となった。

また、研究班のメンバーを中心に開催した「患者視点」について学習する公開ワークショップの結果報告が、日本医学教育学会の学会誌『医学教育』48 巻 5 号（2017 年 11 月）に掲載された。この報告の中では、従来の「患者視点」を取り巻く状況の問題点が明示され、これを克服するための新たな手法について検討がなされた。医学教育のコアカリキュラムが大きく見直されている現在、学際性に富む本研究班からの問題提起は、医学教育の実践者・研究者らから高い評価を得た。

2018 年度

2017 年度の成果をふまえ、2018 年度は研究の第二段階として、患者・当事者が抱える諸問題の理解に関する方法的検討に着手した。具体的には、医師・看護師・薬剤師・社会福祉士・介護支援専門員ほか、保健・医療・福祉の対人援助職従事者が臨床で参照できる患者視点理解のためのプログラム（理論的枠組み～手法～実践ツール）の骨子について、既存の手法の問題点を整理する作業を通じてとりまとめた。

ここでは、研究代表者・研究分担者それぞれの専門領域・研究知見、すなわち、患者の Lay Expertise に関する研究（松繁）、共感能力の育成と対話の技法に関する研究（孫）、健康不安・主観的健康観に関する研究（三澤）、患者を取り巻く治療の「不確実性」に関する研究（牛山）が参照・統合された。近年の「意思決定支援」のアプローチとは異なり、「問題解決」を必ずしも前提とせず、病や障害の当事者の自己理解に焦点を当てる、独自のプログラムの骨子が作成された。

患者・当事者の自己理解を形成するアプローチとして本研究が採用しているのは、近年、科学コミュニケーション等の場で成果を上げてきている熟議（deliberation）アプローチである。熟議アプローチにおいては、医療専門職の所見やエビデンスの説明や同意は目指すべき到達点とするのではなく、熟議に参加する者同士（医療のコンテクストでいえば患者と医療者）の間に見解の相違が存在する場合に、その相違の背景にある、それぞれの思考様式・プライオリティを辿っていくこと自体が目的となる。

2019 年度

2017 年度・2018 年度の研究成果をふまえ、2019 年に研究メンバーの共同執筆によってまとめた研究報告が、査読付きの学術論文（孫大輔，三澤仁平，牛山美穂，畠山洋輔，松繁卓哉. 医療者教育における「患者視点」に付随する諸課題と熟議アプローチの可能性．保健医療社会学論集

29(2): 74-84,）として出版され、患者視点を理解するアプローチとしての「熟議」および「共感」に関する理論的枠組みが整理された。

これら本研究の中心的概念について、2019 年度中には、より実践レベルでの応用に耐えうるよう検討が進められた。具体的には、既存の医療コミュニケーションの限界を乗り越えるための方途として、コミュニケーションにおける非言語的要素に着目し、患者の「納得」を生み出すことに主眼を置く臨床実践アプローチの開発というかたちでゴール設定が一層明確にされ、研究班員それぞれの専門領域から知見を共有してきた。

年度末の 2020 年 2 月に、これまでの成果を公表し、医療従事者らからのフィードバックを得る機会として、公開ワークショップ「人が医療に『納得』するとき」を開催した。保健・医療・福祉に従事するワークショップ参加者からは、臨床応用の根幹にかかわる貴重なフィードバックがあり、プログラムの精緻化へ向けての具体的な作業課題を得ることができた。

2020 年度

2020 年度は、本研究課題の仕上げの年として、患者視点の理解と臨床活用のためのプログラムの実践に従事した。研究代表者の松繁が所属する国立保健医療科学院では、保健・医療・福祉の実務者教育を実施しており、その中で、患者視点理解のための本研究の知見を活用した教育プログラムを行った。具体的には、都道府県・政令指定都市が設置する「難病相談支援センター」の職員向けの研修の中で、患者の経験・考え・視点等が、他の患者にとっての有益な資源となる「ピア・サポート」に着眼し、ピア・サポートを充実させるためのポイント・工夫・留意点などについて学習することのできるプログラムを実施し、受講者の感想・習熟度・課題点等について、アンケート結果から分析を行った。

研究分担者であり総合診療医の孫は、患者視点の理解のアプローチとしての「ダイアローグ」に関する研究に基づき、ダイアローグを応用した臨床実践を展開してきた。これら実践から得た知見は、研究班において共有・検討され、開発プログラムの精査に用いられた。研究分担者であり人類学所の牛山は、本研究班が患者視点の理解における鍵概念として重視する「納得」について、アトピー性皮膚炎患者の語りを収集・分析する作業を継続した。

2021 年度・2022 年度

過去 4 年間の成果をとりまとめ、定例の研究班会議の中で、それらの知見を共有し、患者の「納得」を可能にする臨床実践のあり方について整理した。

これら成果を広く臨床実践者や研究者らに公開するために、第 47 回日本保健医療社会学会大会へ、ラウンド・テーブル・ディスカッションの企画としてエントリーし、採択された。当日は、医療従事者、研究者、その他多くの参加者から多くの質問が寄せられ、また同時に、この知見を臨床で応用するにあたっての大きな期待の言葉が寄せられ、本研究の知見の意義の大きさを確認する機会となった。

引用文献

Lawton, J.（2003）Lay experiences of health and illness: past research and future agendas. Sociology of Health and Illness. 2003;25:23-40.
松繁卓哉（2010）『「患者中心の医療」という言説―患者の「知」の社会学―』立教大学出版会.
Matsushige T, Tsutsui T, Otaga M. (2012) Mutual aid beyond formal institutions: Integrated home care in Japan. Current Sociology. 60 (4) 538-550. Sage Publication
三澤仁平（2013）将来への展望および現在の社会生活に関する不安がもたらす健康不安への影響『応用社会学研究』(55) 127-139.
Nettleton, S., Woods, B., Burrows, R. and Kerr, A. (2010) Experiencing Food Allergy and Food Intolerance: An Analysis of Lay Accounts Sociology 44, 2, 289-305.
孫大輔（2013）新しい患者-医療者関係の構築に向けて－カフェ型ヘルスコミュニケーションの可能性－.日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌 4 巻 1 号: 13-17.
牛山美穂（2015）『ステロイドと「患者の知」：アトピー性皮膚炎のエスノグラフィー』新曜社.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 湯川 慶子、川尻 洋美、松繁 卓哉	４．巻 70
２．論文標題 難病患者と家族を支援する難病相談支援センターの役割と今後の展望	５．発行年 2021年
３．雑誌名 保健医療科学	６．最初と最後の頁 502～513
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20683/jniph.70.5_502	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 孫大輔，森田敬史	４．巻 103
２．論文標題 臨床と宗教：死に臨む患者に私ができること（第1回）臨床宗教師の誕生	５．発行年 2021年
３．雑誌名 治療	６．最初と最後の頁 230-233
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 孫大輔	４．巻 70
２．論文標題 医療者がまちに出るということ：モバイル屋台de健康カフェの活動から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 家庭科	６．最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 孫大輔	４．巻 109
２．論文標題 地域医療を実践する内科医とは 具体的な地域医療活動 地域住民との対話	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本内科学会雑誌	６．最初と最後の頁 2364-2369
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 孫大輔，森田敬史	4．巻 103
2．論文標題 臨床と宗教：死に臨む患者に私ができること（第2回）現代の宗教観と臨床宗教師のあり方	5．発行年 2021年
3．雑誌名 治療	6．最初と最後の頁 372-376
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松繁卓哉	4．巻 31
2．論文標題 スクリーニング論争と監視医療論の今日的課題	5．発行年 2020年
3．雑誌名 保健医療社会学論集	6．最初と最後の頁 94-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 綿引 信義、松繁 卓哉	4．巻 69
2．論文標題 ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）実現に向けた医療保障制度の構築を担う人材の育成について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 保健医療科学	6．最初と最後の頁 33～40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20683/jniph.69.1_33	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松繁 卓哉	4．巻 4
2．論文標題 社会学と社会的実践(social exercise)の交差する領域 ： 健康と病のグレーエリアを事例として（特集 社会学的知識への期待からみた現代社会と社会学）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 新社会学研究	6．最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 孫大輔	4．巻 24(2)
2．論文標題 対話する医療: 人々のケアにおける対話（ダイアローグ）とは（特集 日本老年看護学会第 24 回学術集会)--(教育講演)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本老年看護学会誌	6．最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 孫 大輔	4．巻 20
2．論文標題 人々の「健康」をいかに支えるか?銭湯と地域住民の健康の関係?	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本赤十字看護学会誌	6．最初と最後の頁 152～156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24754/jjrcsns.20.1_152	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 孫 大輔	4．巻 50
2．論文標題 4．患者の語りを用いたプロフェッショナリズム教育	5．発行年 2019年
3．雑誌名 医学教育	6．最初と最後の頁 507～511
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11307/mededjapan.50.5_507	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 孫 大輔	4．巻 78
2．論文標題 特集 病院と患者の関係-informed consentを越えて　これからの時代に求められる患者-医療者関係-「対話」の重要性	5．発行年 2019年
3．雑誌名 病院	6．最初と最後の頁 816～819
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.1541211076	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 孫大輔，三澤仁平，牛山美穂，畠山洋輔，松繁卓哉	4．巻 29(2)
2．論文標題 医療者教育における「患者視点」に付随する諸課題と熟議アプローチの可能性	5．発行年 2019年
3．雑誌名 保健医療社会学論集	6．最初と最後の頁 74-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 牛山美穂	4．巻 20
2．論文標題 「論争中の病い」と医師の抱く薬剤観：アトピー性皮膚炎治療におけるステロイドの事例から	5．発行年 2019年
3．雑誌名 人間関係学研究	6．最初と最後の頁 149-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 牛山美穂	4．巻 28(1)
2．論文標題 書評論文リプライ：患者の「信念」から「知」へ	5．発行年 2017年
3．雑誌名 保健医療社会学論集	6．最初と最後の頁 78-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 孫大輔，松繁卓哉，牛山美穂，畠山洋輔，三澤仁平，朝比奈真由美，飯田淳子，井上千鹿子，大磯義一郎，樫田美雄，児玉聡，錦織宏，野村英樹，平山陽示，星野晋，米田博，和泉俊一郎，宮田靖志	4．巻 48(5)
2．論文標題 ワークショップ「共感と〈患者視点〉―医学教育への示唆」開催報告	5．発行年 2017年
3．雑誌名 医学教育	6．最初と最後の頁 311-314
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松繁卓哉	4．巻 32(2)
2．論文標題 セルフケア/セルフマネジメントの支援をめぐる今日的課題	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本保健医療行動科学会雑誌	6．最初と最後の頁 15-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　4件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 松繁卓哉，牛山美穂，孫大輔，畠山洋輔，吉田澄恵
2．発表標題 （ラウンドテーブルディスカッション）「納得」「熟議」「共感」―対人支援のキーコンセプトを考える―「問題解決」「意思決定」を前提としないケアの構想―
3．学会等名 第47回日本保健医療社会学会大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 孫大輔
2．発表標題 シンポジウム「慢性疾患を抱えて生きる患者と共に生きる医療者の心構え」　慢性疾患患者と医師の〈ダイアローグ〉
3．学会等名 第63回日本糖尿病学会年次学術集会（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 孫大輔
2．発表標題 シンポジウム「哲学プラクティスとコミュニティ創生」 家庭医による〈対話〉―診療・コミュニティ活動における事例より―
3．学会等名 日本哲学プラクティス学会第二回大会（招待講演）
4．発表年 2020年

１．発表者名 孫大輔
２．発表標題 教育講演3　対話する医療：人々のケアにおけるダイアローグ
３．学会等名 第9回日本理学療法教育学会学術大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 松繁卓哉
２．発表標題 Health Behavior から Health Practice へ？―Social Practice Theory の現在と可能性―
３．学会等名 第46回日本保健医療社会学会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松繁 卓哉
２．発表標題 地域包括ケアシステム（保健・保健・福祉）への「住民参加―システムにおける「互助」 の問題
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 松繁卓哉
２．発表標題 社会学と社会的実践（social exercise）の交差する領域―健康と病のグレーエリアを事例として―
３．学会等名 第91回日本社会学会大会　テーマセッション６「社会学的知識への期待からみた現代社会と社会学－社会学 1.0 ？／ 1.5 ？／ 2.0」
４．発表年 2018年～2019年

１．発表者名 Matsushige, Takuya
２．発表標題 Peer Workers As the Health Workforce in Japan: Broadening the Concept of “Health Workforce” and Current Challenges
３．学会等名 International Sociological Association XIX World Congress of Sociology（国際学会）
４．発表年 2018年～2019年

１．発表者名 樫田美雄，松繁卓哉，油井清光，孫大輔
２．発表標題 科研費審査における学際的協同研究の扱いはどうあるべきか－科研費改革 2018 と保健医療社会学の未来－
３．学会等名 第43回日本保健医療社会学会大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐藤洋子，川尻洋美，伊東喜司男，坂井洋治，照喜名通，松繁卓哉，湯川慶子，北村聖，池田佳生，水島洋
２．発表標題 相談対応行動分析調査に基づく、難病相談支援ネットワークシステムの導入および利用支援の検討
３．学会等名 第5回日本難病医療ネットワーク学会学術集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 森川美絵，森山葉子，白岩健， 大夛賀政昭，松繁卓哉
２．発表標題 要介護高齢者の社会ケア関連QOL:日本語版ASCOTによる測定(1)
３．学会等名 第76回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2017年

１．発表者名 川尻洋美，松繁卓哉，湯川慶子，佐藤洋子，金古さつき，池田佳生
２．発表標題 全国の難病相談支援センターにおけるピア・サポートおよびピア・サポーター養成研修に関する実態調査（アンケート調査）
３．学会等名 第5回日本難病医療ネットワーク学会学術集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 松繁卓哉，川尻洋美，湯川慶子，佐藤洋子，金古さつき，池田佳生
２．発表標題 全国の難病相談支援センターにおけるピア・サポートおよびピア・サポーター養成研修に関する実態調査（インタビュー調査）
３．学会等名 第5回日本難病医療ネットワーク学会学術集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 松繁卓哉
２．発表標題 セルフケア／セルフマネジメントの支援をめぐる今日的課題
３．学会等名 第32回日本保健医療行動科学会学術大会（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計3件

１．著者名 孫　大輔	４．発行年 2022年
２．出版社 メディカル・サイエンス・インターナショナル	５．総ページ数 416
３．書名 患者をエンパワーする慢性疾患セルフマネジメントの手引き	

１．著者名 錦織 宏、三好 沙耶佳	４．発行年 2020年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 390
３．書名 指導医のための医学教育学	

１．著者名 USHIYAMA Miho	４．発行年 2020年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 156
３．書名 Incorporating Patient Knowledge in Japan and the UK A study of Eczema and the Steroid Controversy	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	牛山　美穂 (Ushiyama Miho) (30434236)	大妻女子大学・人間関係学部・准教授 (32604)	
研究分担者	孫　大輔 (Son Daisuke) (40637039)	鳥取大学・医学部・講師 (15101)	
研究分担者	三澤　仁平 (Misawa Jinpei) (80612928)	日本大学・医学部・助教 (32665)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関